

地域人材育成研究 第2号

特集

各地の高校魅力化プロジェクトを紹介

愛媛県立今治北高等学校 大三島分校
生徒インタビュー

奈良教育大学 樋田有一郎

インタビューは二〇一九年六月二七日、一三時から一五時まで、会場は大三島分校の校長室。インタビュー対象は、分校を選んだ分校生徒四名、および、活動の補足説明を行うために、二神弘明 大三島分校 分校長、吉住牧人教諭（教務主任・写真部顧問）が同席して行われた。インタビューは樋田有一郎ほか地域人材育成研究会の大学研究者一名である。

あらかじめ用意してあったインタビュー項目は、

- A. 活動のやりがい
 - B. 自分が活動に参加して得たと思うこと、自分が変化したと思うこと
 - C. 地域についての思い
 - D. 将来の地域との関わりかた
 - E. その他
- である。

大三島分校生徒 青山（二年生）、緑川（二年生）、
赤木（三年生）、柴田（三年生）

今号で扱った愛媛県立今治北高等学校大三島分校のインタビューデータは本誌第一号で扱った愛媛県立三崎高等学校のインタビューデータと併せて次で更に詳しく分析しているので参照されたい。

樋田有一郎二〇二〇「高校魅力化における『地域の特色を生かした教育』のあり方を考える―学習目標と学習効果の整合性に着目して―」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊二七号「早稲田大学大学院教育学研究科 五一―六三頁

調査概要

地域活性化の活動でうれしかったこと、大変だったこと、地域との交流



【うれしかったのは】

伝わった。来てくれた。褒めてもらった。応援や励まし。おもしろかった。行動力が身に付いた。友だちの輪・人脈が広がった。

【大変なのは】

自ら進んで働きかけること。

【地域の人との交流は】

助けてくれた。温かかった。島のこと・人を知れた。島のイメージが変わった。

——大三島分校で行っている活動に関して、入学前にどのようなイメージを持っていた、実際にそれをやってみて、どのように感じたのか教えてください。いろいろな活動があると思いますが、自分が今、一番ハマっていることについて教えてもらえると嬉しいです。

青山 この学校が外部に対して、自分の学校や地域のことを発信していることを知って入学しました。実際に他の学校と協力して、地域を発信していく活動してみると、思っていたよりも大変でしたが、聞いてくれる人や見てくれる人の反応を見て、この学校や地域のおよさが伝わってよかったと思いました。また、観光を通してここに来てくれ

ることがとてもうれしかったです。

——実際に行ってみて、どのようなところが大変でしたか？

青山 自分から進んで話しかけなければ全く伝わらないことです。それが大変だと思いました。

——学校に来て、実際に何を行ってみましたか？

青山 去年の夏ぐらいに、島しょ部の学校の人たちと一緒に、島しょ部の学校のよさを観光客の人たちに伝えていくという活動がありました。

緑川 入学する前は私も、大三島分校がいろいろな地域活性化に取り組んでいることは知っていましたが、人数も少ないし、大規模校に比べてできないことがたくさんあるので、私は進路を迷いました。

大三島分校に来て、地域活性化に携わって、大三島分校に入学したい生徒や保護者の人たちと話をすると、小規模校だけど本当にいい学校だと褒めてくれることがとてもうれしかったです。

地域の方々も「大三島分校は頑張っていますね」というように、応援や励ましの言葉をくれることにとてもやりがいがあります。

——実際に入ってみて、一番印象に残っているのはどのような活動ですか？

緑川 私は地域の方々と協力をして、夏に夕涼み会というイベントを行い、屋台を出しました。それも地域の方々が協力してくださったからできたことです。私たち分校生だけでは絶対にできませんでした。

そういう地域のひととのつながりがとても温かいと思いました。

——夕涼み会で助けられたのはどのようなときですか？ 夕涼み会の面白さは？

緑川 島内から思った以上にいろいろな人が来てくれて、すぐに完売や売り切れになりました。予想以上に人が来てくれたことがうれしかったです。

——赤木さんはどうでしたか？

赤木 私はずっと地元に住んでいました。高校の本当にすぐ近くに家があります。兄が大三島分校にいたので、少しは分校のことを知っていました。

中学校のときに進路のことを考え始めました。正直、私も進路について、今治北高校の分校か、伯方高校かと迷っていましたが、結局は大三島分校にしました。

正直に言えば、入学前は分校に対してあまり関心はありませんでした。廃校の危機にあることは聞いていました。小学校のときにも一回、廃校の話は出ていました。私は「また廃校になりそう」ぐらいの感覚で捉えていました。自分が入学するときに卒業はできるので大丈夫、という感覚でした。

私が一年生で入学したちょうどその年に、パンフレットを作る活動がありました。それが少し面白そうだと思って、パンフレット製作に携わりました。

それを通して、私は実際にイノシシ関係の革製品や猪骨ラーメンの人を取材しました。

取材をしていくうちに、ずっとこの町で暮らしていた自分の島なのに、本当に知らないことが多いと思いました。自分が知っていた世界はごく一部の本当に狭い視野しかないことに気づかされました。

革製品や猪骨ラーメンの方は「地域おこし協力隊」として大三島で活動し、任期終了後に定住した移住者の方でした。私もそのときの取材で初めて、地域おこし協力隊の存在を知りました。そうやって大三島を元気にしようという活動を頑張っている人が移住者だということに、とても驚きました。

もちろん島の人たちも大三島を元気にする気持ちはあると思います。が、島のためにこれだけ頑張ってくれている人がいることに気づいて、とてもうれしかったです。

——もともと地域に住んでいるけれど、地域のことを知らなかったのですか？

赤木 本当に全く知りませんでした。あまり島自体を回ることもありませんでした。この取材を通して、この島で様々な仕事をしている人がたくさんいることに気づきました。

——島に対するイメージは変わりましたか？

赤木 最初は何もないし、他の所と比べると、廃れている島で本当に田舎という感じでしたが、実際に外に出てみると、島にしかない良さがあると思いました。

私は二年生の冬に修学旅行で東京に行きました。東京はとても人が多かったです。あとはみんな速く歩くので、歩くだけで疲れました。家にいる普通のときと比べて、尋常ではないぐらいに疲れたので、修学旅行のときはすぐに寝付きました。時間の進み方が全く違う感覚に陥りました。

東京ではとにかく時間に追われる感じでした。次の電車はこの時間に乗らなければいけない、ここに行かなければいけないというように、時間内で行動しなければいけないので、仕方ない部分もあるかもしれません。

とにかく、時間の進み方が速い感覚がありました。

島に帰ってくると、島独特ののんびりとした時間を過ごすことができました。同じ日本なのに、時間の経過がこれだけ違うということを感じました。

私は星空を見ることが好きです。特に冬は空気が澄んでいて、とてもきれいに見ることができます。東京もちょうど冬でしたが、きれいでないわけはありませんが、空が見える範囲がとても狭いというか、こと比べて高い建物ばかりなので、見える範囲がとても小さいです。私の学校からの帰り道は電柱や高い建物が何もないので、とても広い空を見ることができます。

これも島にいるからこそ見える景色ということに気づかされました。



いのししバーガー用の解体作業（文化祭）

柴田 ここに入学する前は地域活性化のいろいろな活動をしていることは全く知りませんでした。進路はこの高校に決めていました。この高校にきた理由は将来のためにいろいろとここで勉強して次に生かしたいことがあったからです。

——柴田さんは大三島出身ですか？

柴田 はい。入学して先生から「活動をしてみませんか」という誘いが来るまでは、聞かされていたかもしれないが、そのような活動については覚えていません。あまり関心はありませんでした。

参加をしていくうちに、楽しくて面白くなりました。普通の高校生活では味わえないような体験をさせてもらって、とてもいい経験になりました。

高校生の手による地域おこしイベントを開催し、そのクイズ大会で司会をさせてもらいました。そのときにいろいろな人と打ち合わせをしていくうちに、何でもできるような気がしてきました。失敗を恐れずにどんどんやっていく行動力が、そこで身に付いたと思います。

——最初は地域活性化のようなことは全く考えずに、進学のことだけを考えて来た。でも実際に取り組んでみてよかったと思いますか？
それとも、大変だと思えますか？

柴田 とてもよかったです。イベントに行って、そこで人と関わって、友達の輪が広がっていききました。人脈が広がって、とてもうれしいです。



——最初に自信がついたのは地域おこしイベントのときだそうですが、その後もイベントに出ましたか？

柴田 はい。いろいろなプレゼンテーションをさせてもらいました。

——柴田さんに友達ができたことやいろいろな広がり、学校の中だけではないということですか？

柴田 そうです。広島県や愛媛県にも友達が広がりました。イベントに来てくださったお客さんや地域の方にも広がりました。

——高校以外の友達についてはどうですか？

柴田 いろいろな社会人との出会いもあり、高校生活では体験できない話を聞かせてもらったことがうれしかったです。

二神分校長 「バリチャレンジユニバーシティ」でも人脈が広がったのではないですか。

——「バリチャレンジユニバーシティ」とは？

柴田 「バリチャレンジユニバーシティ」、略してBCUです。今治市が主催するイベントです。

大学生や社会人や高校生が今治市に集まってグループを作り、グループワークが行われます。年齢や立場は様々でしたが、グループのみん

なと仲良くなって、今もLINEで連絡は取り合っています。

—— 一番印象に残っている人とのつながりは何がありますか？

柴田 バリチャレンジュニバーシティでサイボウズ株式会社の青野社長が審査員で来られました。私たちがワークショップで考えたことを披露する発表会があつて、そのときに青野さんから「とても良い」と言ってもらえました。

副賞として、青野さんが取り組んでいるサイボウズのイベントに招待してもらうという、とても貴重な体験をさせていただきました。

吉住教諭 実は今、大三島分校の振興対策協議会のメンバーにヤノさんという方がいます。BCUに参加して柴田がヤノさんとながつたことがきっかけで、ヤノさんが大三島分校に興味を持ち始め、学校の運営に協力してくださることになったので、生徒の力は大きいと思います。

—— 間をつないだのですね？

柴田 そうです。知らず知らずのうちにです。

活動に参加して得られた積極性、話す力、プレゼン力、かわる力



【積極性は】

自分を取り組まなければ駄目だという責任感が出てきた。中学校時代に比べて積極的になった。

【人と話すことは】

人前で話すことが多くなった。人と話すことがとても好きになった。

【プレゼンテーションは】

プレゼンテーションがうまくなっていることを感じる。自分が思っていた以上にアドリブでプレゼンテーションが出来た。本当に楽しいという気持ちが外部の人に伝わればいい。楽しそうと感じてもらえてうれしかった。

【かわる力は】

コミュニケーション能力が上がった。自分のできることが広がった感じがする。人との交流が広がった。

——皆さんは二年生と三年生ですね。学年で違う感想もあると思いますが、自分が活動に参加して得たと思うこと、自分が変化したことについて教えてください。

青山 この学校に来る前は、自分から誰かに何かを伝えることがとても苦手で、本当に全く駄目でした。

いろいろな活動に参加してから、呼び込みなどの活動をして、自分が取り組まなければ駄目だという責任感が出てきました。それで取り組んでみると、意外と平気で、自分のできることが広がった感じです。

あとはいろいろな人との交流やインタビューをしたことです。この前も制服で歩いていたら、お仕事図鑑の作成でインタビューをした方が話しかけてくれました。

それ以外にもいろいろと一緒に活動してくれた人が、「この前はありがとう」という感じでどんどん話しかけてくれました。この学校に来てからは、前よりも人との交流が広がったと思います。

緑川 中学校のときは人前で話すことは苦手でした。話せと言われると話しますが、それほど好んではしないぐらいです。

大三島分校に来て、人前で話すことがどんどん多くなり、人と話すことも増えました。

中学校のときに比べて、人前で話すことは結構、できるようになりましたし、人と話すことがとても好きになりました。

一人一人が違う人で違う生き方をしているので、その人にしか聞けないことがたくさんあります。どんどん話を広げていくと、本当にキリがないぐらいにいろいろな話をしてくれます。こちらのためにもなるし、その人との人脈のようなものもできます。

人と関わることや話すことが、活動を通して得たことだと思います。

——高校に入ると、人間関係やコミュニケーションの仕方は変わるも

のですか？ 高校から他の学校の子が入ってきます。そうすると、高校デビューのようなことは起きますか？

緑川 友達が増えることですか？

——はい。

緑川 島外から来た人がいるので、人脈は少し増えました。

——それまでの自分のキャラクターが変わることもありますか？

緑川 いえ、ありません。そのままです。

——赤木さんはいかがですか？

赤木 緑川さんと重なりますが、私も中学校のときは、別に仲が悪いわけではありませんが、クラスの中にいると特定の子と固まり、その子たちと端のほうにいる感じのタイプでした。

人前で話すように言われると話しますが、このようなことは向いていないと考えがちで、積極的に前に出ることはほとんどありませんでした。

高校に入って、実際に地域活性化活動をして、私もいろいろな場所でプレゼンテーションをたくさん経験させていただきました。

本格的にプレゼンテーションに参加し始めたのは、二年生の途中からです。

最初はとても緊張していました。自分にできるのだろうかと思っていました。とても緊張するし、失敗したときはどうするのかということや不安がありました。

プレゼンテーションをしていくうちに、自分がどんどんとプレゼンテーションをすることがうまくなっていることを感じる事ができました。先生方も「ここがよかった」と誉めてくれました。自分にもこういうことができるのだと自信につながりました。

高校生になって初めて大勢の前で話すことになりました。最初は本当に不安や緊張ばかりでしたが、三年になって、それがほとんどなくなりました。

この前も大阪と福岡の地域みらい留学のイベントに参加させてもらって、そのときもプレゼンテーションをさせていただきました。このときに初めてアドリブで説明しました。

私はアドリブがうまくありません。でも、実際にやってみると自分が思っていた以上に上手にできました。

地域みらい留学では大阪で八回、福岡では四回プレゼンテーションを行いました。

回数を重ねていくと、ここは言わなくてもいいかもしれないというように、自分で取捨選択ができるようになります。

そうやって自分言うところを選別して、どうすれば効果的に伝わるのかを考えることができました。回を重ねるごとに、自分のプレゼンテーションがうまくなっていると感じるようになりました。

——地域みらい留学では、どのようなところに一番力を入れてプレゼンテーションをしましたか？ 何を伝えることに集中しましたか？





赤木 とにかく大三島分校は楽しいということです。

先ほど入学前の話をしましたが、以前は自分が卒業できるまで無くならなければいいぐらいの感覚でした。島の学校ではそれほどできることはないという偏見があり、他校のほうが楽しいかもしれないと思っていたところがあります。

しかし、大三島分校に実際に入って、いろいろな活動に参加していくたびに、大三島分校がとても楽しくなりました。

島だからというマイナスのイメージはありません。

地域みらい留学では「本当に楽しい」という気持ちで外部の人に伝えたいと思いつつプレゼンテーションをしました。

——自分が楽しいと思ったことをそのまま伝えましたか？

赤木 はい。とにかく大三島分校は全力で楽しめて、他の学校に全く負けないぐらいにいろいろな行事もあり、自分が変わることができる場所でもあるということを伝えました。

柴田 私は自分のコミュニケーション能力がとて上がったと実感しています。

イベントに行くと、知らない人ばかりです。そのワークショップでいかにして自分の意見を相手に伝えるかが重要です。そしてチーム内で雰囲気づくりをする上でもコミュニケーションは必要なので、常に積極的にコミュニケーションを取ろうとしたことで、その能力が向上したように思います。

吉住教諭 イベントではパンフレットを配って頑張ってPRをしていましたね。

柴田 島しょ部高校生による地域おこしイベントでは、興味を持ってもらうと自分たちのイベントブースまで足を運んでもらえます。通る全ての人に声をかけて通行人をキャッチして、面白いイベントがあるということを言いながら、そこに誘導することをしました。

——柴田さんは今、チームでコミュニケーション能力が必要だと言いましたが、チームではいつもどのような役割ですか？

柴田 お笑いというか、いつもムードメーカーの感じの立ち位置です。いじられキャラのような感じです。

——どんなことを伝えることが楽しかったですか？

柴田 私はすぐに気持ちや考えが表情に出るタイプで、自分が楽しいことを伝えているときには自然と笑顔になります。

聞いてくれる人も笑顔になっていて、「楽しそう」ということを感じてもらえてうれしかったです。

——他の人を一緒に楽しくする感じですか？

柴田 そういう感じです。中学校時代に比べて積極的になりました。



分校と島、高校生にとっての地域、地域のためにしたいこと



【自分にとって分校は、島は】

寂れていくのは嫌だ。どこに行っても帰ってくる島。

【高校生にとって地域は】

分校が地域の人に愛されていることが分かった。地域の人から応援されるとうれしい。大三島分校で頑張っているとたくさんの声を掛けてもらえる。

とにかく人とのつながりが深くて温かい。

【したいことは】

分校の良さや地域の温かさを外部の人に知って欲しい。分校にも島にも興味を持つて欲しい。責任感が身に付くことや将来の役に立つ経験ができること、楽しいことを伝えたい。地域の伝統のよさなものを守っていききたいということを思い始めた。

——地域についての思いを教えてください。

青山 私は生まれてからずっと大三島に住んでいます。周りからずっと大三島は良いという評価を聞いてきましたが、私は「普通なのにとこがいのだろう？」と思いながら今までは過ごしてきました。

しかし、活動していく中で大三島は人も良いし、それを取り巻いて

いる環境もとても良いと思うようになりました。

先ほど緑川さんが話していた夕涼み会の活動のときも、島の人たちから「島を良くしたい」と、一緒に何かの活動をしたいということを聞きました。私も大三島がこのまま寂れていくことは嫌だとあらためて感じました。

分校がなくなると、大三島自体は絶対に今よりも活気がなくなります。そうはしたくないので、大三島分校の良さも感じてもらい、地域の温かさや過ごしやすさを外部の人に知ってもらいたいと思います。

——大三島分校が地域にとって大事だ、と入学した後に思いましたか？

青山 入学する前は周りが大三島分校のことをあまり話題にしていなかったで、それほど分校について知る機会がありませんでした。

姉が大三島分校に入学したのをきっかけに、大三島分校のことを知りたくなって、教えてもらいました。そして、大三島分校がどれだけ地域に貢献していて、また地域の方々から愛されているのかということが分かりました。

——青山さんは後輩に大三島分校を勧めますか？

青山 はい、もちろんです。

今治北高校や今治南高校のような大きな高校は、こんなには地域に貢献していないというか、人も多いし、絶対に埋もれてしまうと思います。

大三島分校は少人数で、自分が動かなければ何も進まないで、責

任感が身に付きます。またここにいたほうが絶対に将来の役に立つ経験ができるし、楽しいと思える——という感じで勧めます。

緑川 大三島は本当に人が温かいです。

私は小学校五年生のときに香川から引越してきました。ここに比べると、少し都会でした。

香川のときはすれ違ってもあいさつするかしないかのレベルでしたが、大三島に来たら、すれ違う人みんなが「いってらっしゃい」や「おかえり」と声をかけてくれました。

昨日もスーパーに行くと、「緑川さん」と言われて、誰だろう？ と思いましたが。その人には「テレビで見えています」と言われました。本当に誰だろう？ と思いながら、適当に話していました（笑）。

本当にそれぐらい声を掛けられます。

写真部に入っていますが、去年も全国大会に行きました。いろいろなメディアに取り上げてもらって。それを見た地域のかたがたが「頑張っていますね」や「応援しています」と声をかけてくれることがとてもうれしいです。そのように声をかけてもらおうと、自分も頑張ろうと思います。大三島を盛り上げたいと思いますし、大三島が好きです。

——緑川さんは地域の人から注目されている感じですか？

緑川 はい。その辺を歩いていても、「緑川さん」「テレビで見ました」と声をかけられます。

赤木 スーパースターのようです。

吉住教諭 岡村島に行ったときにも握手を求められていました。

緑川 「テレビで見ました。握手してください」と言われます。

岡村島でもみんなが見てくれると思って、頑張ろうと思いました。

——自分のために頑張ることもあるかもしれませんが、高校のためや地域の代表のような感じで背負うものはありますか？

緑川 背負っていると言えば、背負っていますか？ ねえ、先生。

吉住教諭 去年の写真甲子園では、全国に大三島のことを知ってもらいたいという思いもありましたよね。

緑川 「私たちの大三島」というテーマで、過疎化や少子高齢化といった問題を抱えながら、それでも私たちが愛してやまない大三島の姿を八枚組にまとめて全国大会に出場しました。

その写真を撮るときは、最初はただ楽しいと思って撮っていました。が、あらためて見返すと、大三島をより多くの人に知ってもらいたく、なくしたくない、寂れてほしくないなど、いろいろな感情が湧き出てきました。

実際にその写真を見てくれた方が、「こんな美しいところならぜひ大三島に行ってみよう」と声をかけてくれました。

それがとてもうれしかったので、これからも大三島をテーマに写真を撮ろうと思っています。

——図書室に写真甲子園のマンガがありました。あれは関係がありますか？

緑川 『シャッターガール』ですか？

——そうです。

緑川 あれは写真甲子園の全国大会に出場したときの私たちの様子がマンガ化されたものです。

——かっこいいです。

吉住教諭 今年三一人の新入生が集まらなければ廃校が決定という状況の中でした。分校の存続がかかっていました。

私は意図していませんでしたが、彼女たちがインタビューの中で、とにかく自分たちが写真甲子園に出ることによって大三島の名前を広げて、廃校の危機を救いたい、という話をしました。そこにメディアが興味を持つてくれました。

最初は数校ある取材校の中の一校の予定でした。

それがふたを開けてみると、完全に大三島分校が中心になり、『シャッターガール』たちが大三島分校の未来を救うようなストーリーになりました。

結果として定員一杯の四〇人が入学してくれました。現実がマンガ化された感じです。



——ただ者ではありませんね。サイボウズとつながることになったり、漫画の主人公になったり。

吉住教諭 本当に生徒の力は、私たちの想像をはるかに超えたすごいものがあるように思います。

二神分校長 サイボウズもそうですが、去年は元サッカー日本代表監督の岡田武史さんが、学校の存続に協力したいということで、今治市長さんたちとここまでわざわざ来てくれました。

これも子どもたちの力です。われわれがいくら言っても来ていただけません。

——私たちが来たこともそうです。

次は赤木さん。地域についての思いを語ってもらえますか？

赤木 とにかく活気があふれていてほしいです。

入学する前の話になりますが、大三島分校がなくなること自体に、私は正直ほとんど関心がありませんでした。

しかし実際の地域活性化活動を通して、大三島分校がなくなると、どれだけ良くないことが起こるのかを知りました。

とにかく今は大三島分校になくなってほしくないです。この島に活気がなくなってしまう。

どこに行ったとしても、自分が帰ってくる島です。ここが自分の故郷ということは変わりません。帰ってくるときに活気がなければ寂し



いです。

今は昔よりも店が増えましたし、人も増えた感じがあります。それが続いてほしいと思います。

緑川さんや青山さんも話していましたが、とにかく人が温かいです。大三島分校には地域の人の関わりがすごくあります。

実際に私も大三島分校で頑張っていると、たくさんの方から声をかけてもらえます。分校生が何かをするとなると「私たちにも何かできることはないですか？」と地域の人が声をあげて協力してくれます。

去年から大三島分校の全国募集を始めました。

県外からの子は遠いので、どうしても下宿になると思います。

その下宿先をどのようにするかということが課題となっていました。寮を造ることが話題に出ていましたが、なかなか難しい部分もあって、どうしよう？ となったときには、地域の人たちが学校に集まって、大三島分校の存続について話し合いを持ちました。

島のために「こうしたほうがいいのではないか」と、みんなが全力で案を出してくれました。

下宿のことも「協力できることは何でもするよ」と声をかけてもらったようです。

今、下宿している生徒は四人います。

いろいろな方が協力してくれて、実現できたことがたくさんあります。

夏休みの夕涼み会も、地域の人の協力があって成し遂げることができました。今年も行う予定ですが、地域の方々も楽しみにしてくれていて、「また開催してください」と声をかけていただきました。

とにかく人とのつながりが深く温かいです。

——今、赤木さんにとっての楽しみの話と、学校存続の話と、大三島の話の三つの話題が出てきました。赤木さんにとっては、重なる部分が大きいですか？

赤木 地域活性化で自分がプレゼンテーションに行くことは、自分の能力の向上にもつながりますし、大三島分校のPRにもなります。大三島分校に興味を持ってもらうことで大三島にも興味を持ってもらえます。

大阪や福岡に説明会に行っても、結構、興味深く聞いてくれる方が多いです。

「大三島分校は楽しそうですね」と言ってくれた方もいました。手応えがあるというか、本当に私たちの活動に関心を持って聞いてくれる方が多かったので、うれしいと思いました。

——事前に先生方や地域の人と話をしていて、みなさんの活動の中で、大三島分校の存続、地域活性化、本人が楽しい、という三つの要素があることが分かっていました。

四つ目の要素として、生徒のみなさんが自分自身の成長や向上をとても実感していることはすごいと思って話を聞きました。

柴田 みのるさんはいかがですか？

柴田 感じ方が変わりました。

島だと遊ぶものが海や山に限られてバリエーションがないので、幼い頃は外に出たいという気持ちがとても強かったです。





「私たちの大三島」より（写真甲子園 2018）

しかし高校で地域活性化についてのいろいろな取り組みをしていくうちに、島はいいと思うようになりました。面白いと感じることが多くなって、島を誇りに思うようになっていきました。

分校長先生も言っていました。都会に比べて島には島のゆつたりとした時間が流れていて、とてもラフな感じがして、私は好きです。

地域でも祭りが盛んです。私たちの地域は祭りで化粧をしますが、小さい頃はそのことが嫌で、早く祭りをやめたいと思っていました。

高校生になると、地域の伝統のようなものを守っていきたいと思い始めました。

——最初、中学の頃は遊びたかったですか？

柴田 そうです。

——遊びたいというのは、イメージ的にはイオンなどの感じですか？

柴田 そんな感じです。島にテーマパークとかデパートとか、何かつくればいいのにと思いました。

——それよりも違うことのほうが楽しいと思えるようになりましたか？

柴田 島で起こる一つ一つがとても面白くていい経験にもなります。ちよつとしたことでも喜びとか、楽しさを感じるようになりました。

——何が一番面白かったですか？

柴田 感じ方が大人になりました。

小さい頃に海を見ると、ただ海だと思っていました。今、夕日や海を見ると、きれいだと思います。当たり前ですが、島のワンシーン、ワンシーンが胸にぐっと来る感じがです。

——柴田さんは写真を撮りますか？

柴田 趣味で写真やムービー撮影をしています。

今度したいことは、私目線のムービーを作ることができればいいと思います。

将来の地域との関わり方は——外に出る、そして島に帰りたい



「私たちの大三島」より（写真甲子園 2018）

【外の経験では】

都会に出てまた戻ってきたときに、何か別の感じ方のようなものがあると思っている。

【帰って来たい】

将来の夢はどこでもできる感じ。島に帰ってきて仕事を続けながら老後を過ごすこともいいと思う。

将来ここに帰ってきたい。なぜかという、島にいと守られている気がするから。

ここが唯一の自分の故郷になるので、帰ってくることはできるときは帰ってきたい。

【帰ってからすること】

見守る立場になりたい。

世界のことを持つて帰ってくる。おじいさんになって、世界の話をしたい。

——高校を卒業した後、みなさんは島を出ると思いますが、将来は地域とどのように関わりたいですか？

青山 卒業した後、いったんは出ます。

その後ここに帰ってくるという感じではありません。

できれば少し外の雰囲気というか、ずっと島の田舎暮らしだったので都会に出て、またこちらに戻ってきたときに、何か別の感じ方のようなものがあると思っています。

私が中学校一年生や二年生の頃に比べて、今の大三島は本当に店が増えたとし、若い人も増えたと感じます。

大三島分校だけではなく、大三島分校と地域の人が協力した結果だと思っています。私が大三島に帰ってくるタイミングにも、大三島が活気にあふれ、分校が存続してくれているといいと思います。

緑川 大三島には進学先はないので、私も絶対に外に出なければいけません。島外に出て、専門学校に行つて、おそらく島外で働きます。

私の希望は、退職してから大三島に戻ってきて、今、周りにたくさんいるおばあさんたちのように子どもを大切に、「いつてらっしゃい」と声をかけるような立場になりたいと思います。

一回は外に出ますが、老後は大三島に帰ってきて、子どもを見守る立場になりたいと思います。

赤木 私も進学先のことを考えると、どうしても一度島外に出ることになります。

自分が生まれた島なので、進学をしても帰ってくるのができるときは帰ってきたいと思います。

都会に比べると店は少ないかもしれませんが、向こうでできた友達に遊びに来るように誘うことができればいいと思います。

私が進学で島外に出ると、親が家で一人になってしまいます。

姉はもう働いています。兄は大阪にいますが、とても離れています。私の親は性格的に寂しいということを全く言いません。それを悟らせない感じのタイプです。

実際にどのように思っているかは分かりませんが、親自身も実際に一人になれば寂しいのではないかと思います。私もいろいろと迷惑ばかりかけていたこともあります。ずっと一人にしておくよりは、帰ってくるができるときぐらいは顔を出したいと思っています。

私が目指している将来の夢は、地域のために何かができるという直接的なものではありません。

もし自分の夢をかなえることができ、少し落ち着いたときに、島に帰って住むこともいいと思います。実際にそうなるかどうかは完全に決めていませんが、島に帰って仕事を続けることもいいと思います。

——将来の夢は何ですか？

赤木 私は絵を描くことが好きです。イラスト関係の仕事に就くことができます、と思っています。

——逆に言うと、ここでもできますよね。

赤木 そうです。イラストだとインターネットでも依頼を受け付けてできます。場所を意識することなくできると思います。

まだ確実に決まっていますが、いつかはここに帰ってきたいと思っています。



「なついろ」より（写真甲子園 2018）

柴田 私も将来はここに帰ってきたいと思っています。

島にいと守られている気がします。地域の人やこの学校の先生たちに守られていて、島の外の世界を体感できないままだと、面白い人生を送ってしまいます。

私は外の世界のいろいろな国々に憧れています。世界でいろいろな旅をして、将来は島に帰ってきたいと思っています。

島に守られているので、世界のことを持ち帰ってきます。おじいさんになって、世界の話をしたいです。別に島が悪いわけではありませんが、人生の選択肢は知っていなければ広がらないということが私の中にあります。

青山・緑川 かつこいいです。

柴田 島の子たちに世界のことを話し、子どもたちの選択肢が広がるといいなと思います。それでも島が好きと言って、残ってくれる子がいるとうれしいという思いもあります。

地域で子どもたちに話すことができるおじいさんになっていきたいという思いがあるので、島に帰ってきたいと思っています。

——柴田さんはどんな職業に就きたいですか？

柴田 自衛官になろうと思っています。人助けというか、人の役に立つことが好きです。おじいさんになっても、地域の人々や子どもたちの役に立ちたいという思いがあります。



「出会い」より（写真甲子園 2018）

小さな学校の熱い教育



・みんながイベントに興味を持ち、興味の輪が広がり、楽しく行う。
・いろいろなアイデアを出し、イベントをつくり上げる。
・大三島分校は先生が親身に分かるまで一対一で教えてくれる。
・塾に行っている子はほとんどいない。大三島分校が塾のようなもの。
・全員参加の感じ・誰かがしゃべっていないことはない。みんな
でしようという感じ。

——地域活性化の取り組みをしているときの同級生との関係はどうですか？ 盛り上がる感じですか。あるいは、じっくりと深くいく感じですか？

柴田 みんながイベントに興味を持って、どのようなことをするか、話し合いながら興味の輪が広がっていきます。みんなも興味を持って、楽しくやっています。

——誰かが「こういうことをしたい」と言つと、「いいですね」という感じで手伝ってくれますか？

柴田 高校生ではありますが、夕涼み会も私たちが企画しています。いろいろなアイデアを出して、「それはいい」「もう少しこうしたほうがいい」というように、みんなが積極的に話し合ってイベントをつくり上げました。

——「私は塾があるので帰ります」「ピアノの練習できようは駄目」ということはありますか？

柴田 そんなことはありません。

赤木 ほとんどいません。

青山 大三島分校は先生がとても親身に教えてくれます。分かるまで一対一で教えてくれます。

赤木 塾に行っている子はほとんどいません。

青山 大三島分校が塾のようなものです。

赤木 強いて言うのであれば、バスの最終便の時間です。でも、先生が送ってくれることもあります。

柴田 みんな基本的に最終便までいろいろやっています。

赤木 ギリギリまでいます。

柴田 「あと五分だ！」と言って、ダッシュで行きます。

——一緒にやっていてどうですか？

青山 今までしてきた感じでは、みんなでたくさん案を出します。本当に全員参加のような感じですよ。誰もしゃべっていないということがありません。みんなでしようという感じですよ。